

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語における対応する自動詞と他動詞の意味的關係についての 一考察
Author(s)	犬塚, 優司
Citation	ニダバ , 21 : 67 - 76
Issue Date	1992-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047231
Right	
Relation	



日本語における対応する自動詞と他動詞の 意味的關係についての一考察¹⁾

犬塚 優 司

0. はじめに

本稿の目的は、日本語動詞の中に見られる対応する自動詞と他動詞について、奥津（1967）の仮説、すなわち、対応する自動詞と他動詞は、共通の意義的特徴を持ち、両者が同一の語彙項目として扱うことが出来るという仮説を、アスペクト的観点から検証し、その意味的關係を明らかにすることにある。

1. 自動詞と他動詞

多くの研究者は、日本語の動詞を、自動詞と他動詞に分類している。²⁾しかし、これがどのような規準によって分類されるのかについては、それぞれの研究者によって違っている。一般に、

(1) ある動詞が表す動作がなんらかの対象に影響を及ぼす場合、その動詞は、「他動詞」であり、「他動詞」以外の全ての動詞は、「自動詞」である。

と考えられているようである。

(1)の規準は、明らかに意味論的なものであり、日本語においては、「自動詞」と「他動詞」は、意味論的分类と言うことができるであろう。

もちろん、この他にも、直接受身文を作ることができるかどうかを分類規準に採用している研究者（三上章）³⁾や自動詞他動詞の分類を採用していない研究者（山田孝雄）⁴⁾もいる。

ただし、(1)の規準は、「影響を及ぼす」という点でいくつかの問題を残している。つまり、ある動詞が表す動作が、対象に対してどの程度影響を及ぼすかは、その動作によって様々であるため、その規準は曖昧なものになっている。

(2) 太郎は、窓ガラスを割った。

(3) 次郎は、手紙を書いた。

(4) 三郎は、新聞を読んだ。

(5) 太郎は、制服を着た。

(6) 次郎は、花を愛した。

(7) 三郎は、身を伏せた。

(8) 太郎は、橋を渡った。

これは、「他動性」の問題として、取り扱われている。

しかし、日本語には、明確に「自動詞」と「他動詞」の存在を示すものがある。それは、「自動詞と他動詞の対応」である。

2. 自動詞と他動詞の対応

(割れる, 割る)、(驚く, 驚かす)、(落ちる, 落とす)、(曲がる, 曲げる)のように、日本語の動詞には、形態的に類似した対応する自動詞と他動詞の組が存在する。もちろん、全ての動詞が、対応する自動詞または他動詞を持っているわけではない。⁵⁾

日本語の話し手は、これらの組について、直観的に、なんらかの意味的關係があるものと考えている。

では、これらの組の二つの動詞の間には、どのような関係があるのだろうか。

一般に、対応する自動詞と他動詞は、共通する意味的特徴を持っていると考えられている。奥津(1967)は、

「二つの動詞があり、自動[-Transitive] 他動[+Transitive]という対立、およびそれに必然的に関連する特徴を除いては、全ての文法的、意義的特徴を共有する時、この二動詞間に自・他の対応がある、と言う。」

として、「自・他の対応」の定義として、「文法的、意義的特徴の共有」をあげている。また、奥津(1967)は、上記の定義を構文論的な観点⁶⁾をあわせて、次のように、形式化し、定義づけている。

「自・他の対応とは、次の二文

(i) $N_1 \quad g a \quad N_2 \quad o \quad [+V, +Transitive, X, Y]$

(ii) $N_2 \quad g a \quad [+V, -Transitive, X', Y']$

において、 $Y = Y'$ なる時、 $[+V, +Transitive, X, Y]$ $[+V, -Transitive, X', Y']$ で表される二動詞間の関係を言う。(但し X, X' は自・他の対立に伴って必然的に変化する主語、目的語に関する特徴、例えば主語や目的語が生物であるか無生物であるか、など。)

そして、対応する自動詞と他動詞を一つの語彙項目と考え、「自動化」、「他動化」または「両極化」の転形によって具体的な動詞の形が派生されるとしている。

さて、ここで(9)と(10)のような文の組をみてみよう。

(9) 明子が、その窓ガラスを割った。

(10) その窓ガラスが割れた。

論理的に考えて、(9)が「真」であれば、(10)は「真」であり、(9)と(10)の文が表す意味は、主語と目的語に関する特徴以外は共通している。また、

(11) *恵子は、その窓ガラスを割ったが、その窓ガラスは割れなかった。

(12) *洋子が、その窓ガラスを割ったら、その窓ガラスは割れた。

(11)、(12)は、いずれも、統語論的には適格であろうが、適格な文であるとは言えない。(11)は矛盾を含み、(12)は冗長であるからと考えられる。

(13) 典子は、その窓ガラスを割った。つまり、その窓ガラスは割れた。

「つまり」は、「すなわち」など「言い替え」を表す接続詞で置き換えても適格であるが、「だから」や「しかし」などで置き換えると、適格でなくなる。

このようなことから、文末動詞が「～た」形である場合、奥津(1967)の「自・他の対応」に関する定義は、妥当なものと考えられる。

しかし、

(14) 明子が、その窓ガラスを割る。

(15) その窓ガラスが割れる。

この二文のように、文末動詞が「～る」形である文はどうだろうか。

なお、筆者は、(14)の例文をつくるに当たって、主語となる名詞句を固有名詞に、目的語となる名詞句を特定の単数の事物を表すものとした。したがって、習慣的な事実としての意味や反復の事実としての意味を表しているのではない。本稿においては、習慣や反復のような意味については、考察の対象としない。⁷⁾

では、(14)と(15)の文を特定の事象を表す文と考えよう。その場合、(14)と(15)は、未来の事象を表している。⁸⁾つまり、まだその窓ガラスは、割れていないのである。我々は未来の事象について、決定的に知るすべを持たない以上、(14)と(15)の文は、「予想」あるいは「可能性」を表しているとはしか言えないのである。したがって、(14)と(15)の文について、その「真偽」を問うことはできない。

もちろん、(14)と(15)の文を特定の「時」から切り離し、観念的な事象として捉えることもできる。この時、我々は、(14)と(15)の文の間に、何らかの意味的な共通性があることを直観的に理解している。しかし、今のところ筆者は、その共通した特徴を表現する手段を持たない。

対応する自動詞と他動詞について、(9)と(10)のような関係が常に成立するかと言うと、そうではない。

(16) 明は、そのニワトリを飛ばした。

(17) そのニワトリは飛んだ。

論理的に考えて、(16)が「真」であるからといって、(17)が「真」であるとは限

らない。その証拠に、

(18) 明は、そのニワトリを飛ばしたが、そのニワトリは飛ばなかった。

(19) 清は、そのニワトリを飛ばしたら、そのニワトリは飛んだ。

(18)、(19)は、適格な文である。

これは、(11)、(12)の場合、「割る」という動作は、「その窓ガラス」の意志に関係なくなされ、⁹⁾その結果、必然的に「その窓ガラス」は「割れる」のに対して、(14)、(15)の場合、「飛ばす」という動作は、「そのニワトリ」の意志に困って、「そのニワトリ」が「飛ぶ」という結果が生ずるかどうかが決まるのである。¹⁰⁾

金田一(1950)は、「意義上密接な関係を持つ二つの動詞のうち、他動詞の方は継続動詞に属し、自動詞の方は瞬間動詞に属する、と見られるものが少なからず存する」と指摘している。同様の指摘は、吉川(1973)にも見られ、「「結果の状態」の意味を実現する動詞は、自他の対をなす動詞の自動詞の方に多い。」と述べている。また、吉川(1973)は、「人間が何かの対象に働きかける活動は人間を主体にしたときは他動詞を以ってあらわされる。これに対してその「対象」の働きを、人間との連関を考えずに表現することは、自動詞を以ってあらわされる。人間が働きかける対象が物のことが多いので、自動詞の主語は物のことが多い。」と指摘している。¹¹⁾

実際、対応する自動詞と他動詞が「～ている」形をとった場合、その文が表す意味は、「自・他の対立に伴って必然的に変化する主語、目的語に関する特徴」以上に異なることが多い。

(20) 誠は、そのリングを落としている。

(21) そのリングは落ちている。

(20)が「真」であるからといって、(21)が「真」であるとは限らないようである。それは、この二つの文が示している「時」が必ずしも一致しているとは限らないためである。¹²⁾このような自動詞と他動詞の対応の組には、(曲がる、曲げる)、(伸びる、伸ばす)などがある。

一方、

(22) 良子が、あの笛を鳴らしている。

(23) あの笛が鳴っている。

この二文についてみると、(22)は、「習慣」を示すこともできるが、その場合を除いて考えると、(22)が「真」であれば、(23)も「真」であり、(22)、(23)の示している「時」は同じである。このような自動詞と他動詞の対応の組には、(残る、残す)、(回る、回す)などがある。

また、

(24) 明子が、その窓ガラスを割っている。

(25) その窓ガラスが割れている。

(24)、(25)の組についても、(22)、(23)の組と同じことが言える。このような自動詞と他動詞の対応の組には、(帰る, 帰す)、(終わる, 終える)などがある。

では、(落ちる, 落とす)、(鳴る, 鳴らす)、(割れる, 割る)の各組の間にどのような差異があるのだろうか。それは、各組の動詞の示す動作と「時」との関係が、それぞれ異なっていることによるものと考えられる。(20)～(25)の文が示している「時」について考えてみる。

まず、(20)と(21)について考えてみよう。次の(26)は、時間の流れを線状に示したものである。

(26)

--△--○--◎--□--▽--→ t
A B C D E

ただし、A～Eは、次の時点を示している。

- A：動作が開始される前の過去の任意の一点
- B：そのリングを落とすための動作を開始した時点
- C：そのリングがリングの木の枝から離れた時点
- D：そのリングが地面に到達した時点
- E：そのリングが地面に到達した後の未来の任意の一点

(20)は「基本的」に(26)のBとCの間の時間(以下「B-C」と表す)を示している(正確には、Bは含まれるが、Cは含まれない)のに対して、(21)は「基本的」にはD-Eを示していると考えられるからである。もちろん、(20)、(21)がC-Dを示しているとも考えることも可能であるが、これは明らかに「特殊な」場合と言える。

¹³⁾なぜなら、それは非常に短い時間と考えられているからである。¹⁴⁾

次に、(22)と(23)について考えてみよう。

(27)

--△--○--◎--□--▽--→ t
A B C D E

ただし、A～Eは、次の時点を示している。

- A：動作が開始される前の過去の任意の一点
- B：その笛を鳴らすための動作を開始した時点
- C：その笛が音を出し始めた時点
- D：その笛が音を出さなくなった時点

E：その笛が音を出さなくなった後の未来の任意の一点

(22)、(23)共に、C-Dを示している。では、「鳴らしている」は、なぜB-Cを表すことができないのか。それは、B-Cは、まだ、対象である「その笛」に対して、働きかけを行っていないからである。「鳴らす」という動作は、「鳴る」という状態を持続させることであり、C-Dに動作の継続が存在するからである。また、「鳴らす」ことを中止したと同時に、「鳴る」ことも途絶えてしまうのである。

最後に、(24)と(25)について考えてみよう。

(28)

--△--○--◎--□--▽--→ t
A B C D E

ただし、A~Eは、次の時点を示している。

- A：動作が開始される前の過去の任意の一点
- B：その窓ガラスを割るための動作を開始した時点
- C：その窓ガラスが割れ始めた時点
- D：その窓ガラスがそれ以上割れなくなった時点
- E：その窓ガラスがそれ以上割れなくなった後の未来の任意の一点

(24)、(25)は、共にD-Eを示している。C-Dは、非常に短い時間であり、我々は、普通知覚できない。また、B-Cは、まだ、対象である「その窓ガラス」に対して、働きかけを行っていない。したがって、「割っている」は、「割れえている」と同じ「時」を表すことになる。

このように、(落ちる, 落とす)、(鳴る, 鳴らす)、(割れる, 割る)の各組が、「～ている」形をとった場合の各組の間の差異は、各動詞の示す動作と「時」との関係の多様性によるものといえる。

以上のことから、対応する自動詞と他動詞といっても、そのアスペクト的振舞いは、同じではなく、それは各動詞が示す動作と時の関係に依存していることが、明らかになった。

3. 結び

奥津(1967)は、自・他の対応を明確に定義し、対応する自動詞と他動詞を一つの語彙項目と考え、「自動化」、「他動化」または「両極化」の「転形」によって具体的な動詞の形が派生されると考えている。しかし、アスペクト的な観点から見ると、単純な「転形」は許されない。アスペクト的な配慮がそこに必要なのである。¹⁵⁾¹⁶⁾それをどのよ

うに形式化するかは、今後の課題であるが、仁田（1983）に示されている「範疇的意義」による形式化が一番有用ではないかと、考えられる。

注

1) 本稿の作成に当たり、広島大学文学部教授吉川守先生のご指導とご助言を戴いた。また、広島大学留学生センター助手峯正志氏、広島大学大学院文学研究科学生近松明彦氏、マーヒル・A. M. エルシエルベリー氏から有益なご意見を戴いた。この場を借りて、感謝の意を表す。

2) 動詞を自動詞と他動詞に分類することは、本宜春庭『詞の通路』に遡るといわれている。奥津（1967）参照。

3) 三上（1953）参照。

4) 山田（1908）参照。

5) 早津（1989a）は、対応する自動詞をもつ他動詞を「有対他動詞」と、対応する自動詞をもたない他動詞を「無対他動詞」と呼んでいる。

6) 奥津（1967）は、構文的な観点から、「自・他の対応」を次のように定義している。

「(a) N_1 g a N_2 o V_1
(b) N_2 g a V_2

という二文の間に、(b)においては(a)の主語 N_1 が消え、代わりに(a)の目的語 N_2 が(b)では格助詞「ガ」をとって主語となる、という変化をしながら、しかも両分の意義に或る同一性が保たれている場合、 V_1 と V_2 との間に自・他の対応がある、と言う。」

7) たとえば、(14)を

明子は、窓ガラスを割る。

とすると、習慣の意味を表していると考えられる。

8) 金田一（1950）は、「～する」形で、「現在の状態を表す」動詞を「状態動詞」とし、「未来に起こる事実を表す」「継続動詞」「瞬間動詞」と区別している。鈴木（1957）も、この点に着目し、動詞を「状態性動詞」と「動作性動詞」に分類している。

9) もちろん、「窓ガラス」には意志がないからである。

10) 官島（1985）は、この点に関して、「対象がヒトであるばあい、主体の動作は、対象であるヒトの意志をとおして、間接的に対象の状態を変化させる。だから、主体の意志どおりに、ことがはこばないばあいもある。」と指摘している。

11) 早津（1989b）は、対応する自動詞を持つ他動詞は、「働きかけによって生じる対象の変化を含意する」動詞が多く、対応する自動詞をもたない他動詞は、「働きかけによる対象の変化を含意しない」動詞が多いことを指摘している。

12) もちろん、(20)が「真」であるとき、(21)が「真」である場合もある。(20)の文だけでは、その区別をつけることはできない。しかし、(20)の後に、「仁志は、それを見ていた。」のような文、あるいは、「慶一が、それを拾った。」のような文が続けば、容易に区別できるであろう。

13) 注12)参照。なお、Elsherbery(1991)は、両者を「基本的アスペクト」と「派生的アスペクト」と区別して考察している。

14) 「短い」ととらえるか「長い」ととらえるかは、話し手の知覚および現実の事象に関わってくるだろう。

15) 奥津(1967)において、アスペクト的考慮が欠けていたのは、Fillmore(1968)にみられるように、文が命題的部分とテンス、アスペクト、ムードのような非命題的部分に分けられるという考え方に基づいていると考えられる。標準理論においてもこの傾向がみられる。

16) アスペクトを「転形」の中で配慮せず、「自・他の対立に伴って必然的に変化する主語・目的語に関する特徴」と考えるて処理することもできるだろう。そうすると、主語と目的語の関係がアスペクトと密接に結び付けられていることになる。

参考文献

Bach, E. and Robert T. Harms (eds.) (1968): "Universals in Linguistics" (Holt, Rinehart and Winston)

Chomsky, N. (1965): "Aspects of the Theory of Syntax" (The M.I.T. Press)

チョムスキー, N. / 安井稔(訳) (1970): 『文法理論の諸相』(研究社)

Comrie, B. (1976): "Aspect" (Cambridge University Press)

Elsherbery, Maher A. M. (1991): 「現代日本語におけるアスペクトの研究の現状」(『ニダバ』No.20, pp.1-10)

_____ (Forthcoming): 『日本語動詞アスペクトの研究』(広島大学大学院文学研究科1991年度学位請求論文)

Fillmore, Ch. J. (1968): 'The case for case' (in Bach and Harms (eds.) (1968))

フィルモア, Ch. J. / 田中春美、船城道雄(訳) (1975a): 「格の症例」(フィルモア(1975b)所収)

_____ (1975b): 『格文法の原理』(三省堂)

藤井正(1966): 「「動詞+ている」の意味」(金田一(1976)所収)

早津恵美子(1989a): 「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」(『計量国語学』

- _____ (1989b) : 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」 (『言語研究』
No.95, pp.231-256)
- 池上嘉彦 (1981) : 『「する」と「なる」の言語学 - 言語と文化のタイポロジーへの
試論-』 (大修館書店)
- 犬塚優司 (1989) : 「日本語の『-ている』と中国語の『-着』との対象研究」 (『
ニダバ』No.18, pp.23-32)
- 金田一春彦 (1950) : 「国語動詞の一分類」 (金田一 (編) (1976) 所収)
- _____ (1955) : 「日本語動詞のテンスとアスペクト」 (金田一 (編) (197
6) 所収)
- _____ (編) (1976) : 『日本語動詞のアスペクト』 (麦書房)
- 工藤真由美 (1982) : 「シテイル形式の意味のあり方」 (『日本語学』Vol.1, No.2,
pp.38-47)
- 國廣哲彌 (1982) : 「テンス・アスペクト 日本語・英語」 (森岡健二他 (編) (1
982) 所収)
- 三上章 (1953) : 『現代語法序説』 (刀江書院)
- 宮島達夫 (1985) : 「「ドアをあけたが、あかなかった」 - 動詞の意味における<
結果性>-」 (『計量国語学』Vol.14, No.8, pp.335-353)
- 森岡健二他 (編) (1982) : 『講座日本語学 第11巻 外国語との対照Ⅲ』 (明治
書院)
- 森田良行 (1977) : 『基礎日本語』 (角川書店)
- 村木新次郎 (1991) : 『日本語動詞の諸相』 (ひつじ書房)
- 西尾寅彌 (1954) : 「動詞の派生について - 自他の対立の型による-」 (『国語学』
No.17, pp.105-117)
- 仁田義男 (1982) : 「動詞とアスペクト - 語彙論的統語論の観点から-」 (『計量
国語学』Vol.14, No.3, pp.113-128)
- 奥津敬一郎 (1967) : 「自動化・他動化おろび両極化転形 - 自・他動詞の対応-」
(『国語学』No.70, pp.46-66)
- 尾上圭介 (1982) : 「現代語のテンスとアスペクト」 (『日本語学』Vol.1, No.2, p
p.17-29)
- 柴田武 (編) (1976) : 『ことばの意味』 (平凡社)
- 須賀一好 (1981) : 「併存する自動詞・他動詞の意味」 (『国語学』No.120, pp.31-
41)
- 鈴木重幸 (1957) : 「日本語動詞のすがた (アスペクト) について - ~するの形と
~シテイルの形-」 (金田一 (編) (1976) 所収)

- _____ (1958) : 「日本語の動詞のとき (テンス) とすがた (アスペクト) - ~
シタと~シテイター」 (金田一 (編) (1976) 所収)
- 高橋太郎 (1969) : 「すがたともくろみ」 (金田一 (編) (1976) 所収)
- 寺村秀夫 (1982) : 「テンス・アスペクトのコト的側面とムード的側面」 (『日本語
学』 Vol.1, No.2, pp.4-16)
- 山田小枝 (1984) : 『アスペクト論』 (三修社)
- 山田孝雄 (1908) : 『日本文法論』 (宝文館)
- 吉川武時 (1973) : 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 (金田一 (編) (197
6) 所収)